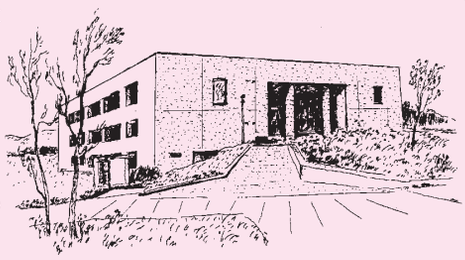
福島大学附属図書館報

書燈

No.38　2007.4.1発行



〒960－1293　福島市金谷川１番地
TEL（024）548－8083
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/
携帯電話版
http://www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm
福島大学附属図書館

この頃の読書推進について思うこと

行政政策学類　千葉　悦子

読書をしない子どもが増えていると言われて久しい。子どもの読書の貧しさを読解力や国語力の低下と結びつけ、子どもの読書推進を国あげて振興する動きが強まっている。2001年12月に制定された「子どもの読書活動の推進に関する法律」がそれである。これをうけて国の基本計画の策定、各自治体における計画づくりが進んでいる。学校での「朝の読書」や「読み聞かせ」の取り組みもこのところ急速に普及している。しかし、子どもの読書奨励が、果たして読書好きの子どもたちを生むことにつながるのだろうか。

筆者は、長野県の飯田市図書館を拠点に活動する飯伊婦人文庫と、ここ数年おつきあいしている。長野県では、戦後まもなく「読書を農村の隅々まで届けること」を目的とした巡回貸し出し文庫が構想され、1951年に「PTA 母親文庫」が始まる。市町村の配本所（地元図書館）に1,000冊の基本図書を備え、毎月100から200冊を更新し、配本所はその地区の母親グループに毎月１回、１冊を貸し出し巡回させるという仕組みである。1960年頃には、会員数は約13万人にのぼった[1)]。

飯伊婦人文庫も巡回貸し出し文庫のひとつとして、飯田市とその周辺の伊那地域を中心に、婦人会を基盤にして1957年に発足した。当時は本を読むのは「嫁らしくない」と言われ、「家中寝静まった後、便所の灯りで読んだ」り、「針仕事の布の下に本を入れて姑の目をごまかした」という。

長野県の文庫の多くは解散・消滅したが、飯伊婦人文庫は停滞・解散の危機を乗り越えながら半世紀を経た現在もなお多彩な活動を展開している。中でも重視しているのが、読書会の読み合い、読書を生活に結びつける生活記録、仲間と共有し深め合う討議、つまり「読むこと」「書くこと」「話し合うこと」である。80歳前後の農家の主婦３人で『源氏物語』の読書会を30年近く続けているグループもある。

最近では2005年度に取り組んだ「高校生との読書会」が注目される。『罪と罰』『破戒』そして『ファウスト』を高校生と読むことに挑戦した。とくに、『ファウスト』の読書会は、声に出して、輪読で、あるいは全員で何度も読み合い、心が揺さぶられる体験となったという。「10代から70代の声で名作を声に出して読むと、作品の世界が体の中へ広がる」とその感動をある会員が語っている。高校生も「歯切れ良く思わず音読したくなるセリフ」、「ひとつひとつの言葉が回りの言葉をひきたてて、より言葉の美しさが増していくようにみえる」と『ファウスト』のリズミカルな言葉の魅力を述べている。

読書は個人の内面世界を広げるものだが、他者と読み合い、話し合うことで、内面世界はさらに豊かなものになっていく。飯伊婦人文庫委員長のＹさんは「みんなとだから、深まり拡がりのある読書ができた」と言い切る。読書の無理強いは、読書嫌いを増やすことになりかねない。深まり、拡がりのある読書は、自ずと読書意欲をかきたてる。読書推進のノウハウではなく、主体的な読書活動に繋がる読書会などの相互学習の場をいかに構築していくかが議論されねばならないのではないか。

1) 島田修一「長野県の読書運動」（『日本の読書運動』国土社、１９６２）

思い出の一冊『開かれた社会とその敵　第一部　−プラトンの呪文−』

カール・R・ポパー著

人間発達文化学類　　内田　詔夫

私の「思い出の一冊」というと、訳者としても関わったこの本になる。本学に赴任して間もない頃、大学の恩師から、院生のK君がこの本を翻訳出版したがっているが手に負えないので半分手伝ってほしいとの連絡があったのがきっかけだが、すぐには返事ができなかった。もちろん本書の名は知っていたが、私自身が社会哲学よりは認識論（知識の哲学）の方に関心があっただけでなく、久野収・市井三郎という大家が翻訳を諦めてその代わりに「きわめて煮つめた論理的骨格だけの」『歴史主義の貧困』を訳すことにしたという曰く付きの大著でもあったからある（結果的に、K君が主として担当した「第二部」と合わせると約2500枚、100万字の原稿になった）。

それでも何とか訳し始めたが、自分の能力と怠惰さから考えるといったい何年かかるのか、本当に完成できるのかなどという気後れもあり、出版社から送られた山のような原稿用紙を前にしながらなかなか筆が進まなかった。そして4，5年経ちようやく近刊予告が出た頃、出版社から突然、翻訳権を巡って他社からクレームが付いたので作業を一時中断してほしい、解決し次第事情説明に伺うなどという連絡が入った。出版中止となれば今までの苦労が水の泡となるので、もちろん戸惑いと憤りを感じたが、一方では解放感のようなものも感じたことを覚えている。結局、数ヶ月（？）の中断を経て再開できることになったが、こんな出来事やK君等との手紙による頻繁な意見交換をも交えながら実質6年以上かかって何とか刊行できたときには、これでようやく大学教員として最低限の仕事は果たせたのかなとほっとした気持ちになった。

さて、本書の内容を一言で言えば、プラトン哲学やその影響下にある現代までの社会諸思想、特にその「歴史信仰」を背景にした権威主義・全体主義的主張に対して、「開かれた社会」と民主主義の重要性を強調するポパーが科学哲学の知見等をもとにして理論的・実践的な観点から徹底的な分析と批判を加えたもの、と言えるだろう（ナチスの迫害を避けてニュージーランドに移住していたポパーがドイツ軍のオーストリア侵攻の報を聞いて最終的に発刊を決断した「戦いの書」でもある）。その意味で、諸思想家に対する批判が過激だとか一面的だという批判があるのは当然とも言えるが、私自身としては、徹底した批判に際しても相手の主張の最強の部分を最大限に尊重しようとする姿勢や、自らの主張を諸科学の知見やある種の選択から生じうる諸帰結についての論理的な考察に依拠させながら、緻密であるとともに一貫してわかりやすい言葉で展開しようとする姿勢に対して、共感し学ぶところが多かった。

彼の科学論が、実証主義者の検証主義や正当化主義を批判し、人間の有限性を見据えて「誤りから学ぶ」ことを成長・進歩の原動力と見る「反証主義」に立つことはよく知られているが、社会哲学において、一挙に理想社会を作り上げようとするユートピア主義はむしろ最悪の全体主義に至らざるを得ないことを論証し、人間が理解しコントロールできる具体的で明らかな悪の除去を通じて改善を図る「漸次的社会工学」の態度が大切であること、「最大多数の最大幸福」ではなく、むしろ「すべての人にとっての最小不幸」こそ追求すべきであることなどを指摘するのも、同じ発想に基づくものである（こうした主張は現代の、主として西欧諸国、一部は日本の指導者にも大きな影響を与えるようになった）。また、当初はプラトン哲学や社会思想という私にとって苦手な題材を扱っているということで敬遠する気持ちが強かったのだが、これらも諸科学の成果や知見を土台にした現代人の「常識」の立場から一貫して解釈し論じることができること、またそれは人間、社会、自然を整合的で合理的に理解するために必要でもあることを豊かな手本によって説得してくれたことは、その後の私の思索に方向性と自信を与えてくれた。

こうした理論的、実践的な影響力もあって、出版以来27年を経た現在も9刷を重ねて細々とながら読み継がれていることは、訳者の一人として大変うれしく思っている。

海外の図書館事情 ～カリフォルニア大学バークレー校～

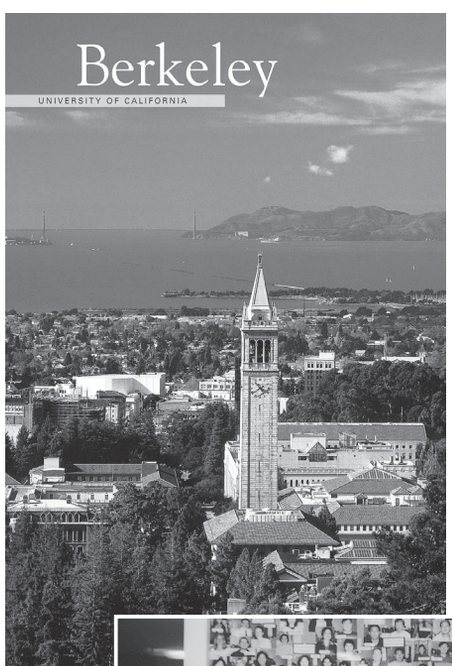
経済経営学類　後藤　康夫

太平洋を挟んで、ほぼ同緯度、こなたの西に位置するのが福島大学、かなたの東に位置するのがカリフォルニア大学バークレー校。2004年10月から半年間、太平洋を渡り、客員研究員としてカリフォルニア大学バークレー校東アジア研究所日本研究センターに在籍する機会を得た。旅立つ前に留学体験者から言われた「向こうでは日本に居てもできることはするな」との忠告をひたすら守り続けたので、図書館に通いつめたり、研究室にこもったりすることはなかった。連日連夜、小高い丘陵の緑地帯に美しい建物が散在する広いキャンパスを駆け巡っては、セミナーや講演会に顔を出したり、丁度大統領選挙前後ということで、キャンパス内外で頻繁に開かれた反ブッシュ集会やイラク戦争反対デモに参加したりして、「生きたアメリカ社会」に身体ごとどっぷり浸ることができた。「図書館通」になることはなかったが、図書館に足を踏み入れることもあったので、少しばかり書くこととしたい。

全米一の人口を擁する広大なカリフォルニア州全土にまたがって10校ほどある大学群、若い学生さんにはハリウッドやビバリーヒルズの近くにあるUCLA名のロサンジェルス分校の方をご存知かもしれないが、最初に創立され、いまは本校となっているのが、金門橋やケーブルカーで有名なサンフランシスコから電車で10分ほどのところにあるバークレー校(学生２万人、院生１万人)。冷戦下1960年代の学生、公民権、ベトナム反戦、女性、環境、福祉など「カウンター・カルチャー」運動の拠点としてつとに有名である。

各分校に所蔵されている書籍は、自宅からでもインターネット検索でき、図書館カウンターに申し込めば、すぐに入手できるシステムになっている。日本関係の蔵書数は、東海岸のハーバード大学とならんで、西海岸の拠点となっており、全米第二位を誇る。ノーベル文学賞を受賞した大江健三郎や遠藤周作の蔵書も寄贈されており、本に書き込まれた直筆をじかに見ることが出来る。新聞は数日遅れるものの朝日や日経の海外版が入っている。日本の大学の紀要や学会誌も入っているが、残念ながら福島大学関係のものはなかった。

日本と大いに異なるのは、図書館の公開性である。誰でも書庫に入り、じかに本を手にとって探索できる。たとえ旅人であっても、パスポート一つあれば、OKである。書庫には各階ごとに広いラウンジがあり、ゆったりソファーに座り、読みふけることも、パソコンを持参してデスクで勉強することもできる。開館時間は、ほぼ朝９時くらいから夜は10時くらいまで。日曜日も開館している。利用者にとっては、これほどありがたいことはない。こうしたことはアメリカ社会全体に共通するようで、情報の公開・共有こそ民主主義の担い手を育むという「草の根」運動思想を実感した。詳しくは、菅谷明子『未来をつくる図書館』(岩波新書)を参照されたい。



学内教員著作寄贈図書

『ホント先生の幼稚園見聞記』
（福島大学附属幼稚園創立 40 周年記念）
発行　福島大学附属幼稚園
作・画　磯崎　康彦著
請求番号：726.5/I85h

私は、平成 11 年から 3 年間、福島大学附属幼稚園長を務めた。4、5 歳の子供に接したことも、教えたこともない。そもそも幼稚園に出入りしたこともない私は、大変な不安にかられた。こうした不安の気持ちや幼稚園での体験をもとに、さらに自分の子供のころの出来事を加味して綴ったものが、絵本『ホント先生の幼稚園見聞記』である。見聞記で述べているように、幼稚園での生活は、子供たちとサッカーや虫とりに興じ、面白い話を喋ったり聞いたりする楽しい日々であった。とりわけ入園式、卒園式、誕生会など、なにかと会があるごとにガマ君やカエル君の話をし、子供たちも熱心に耳を傾けてくれた。園長としての 3 年間は、私の人生にとって忘れられない 1 ページとなった。

私は子供の本に興味があり、かつ執筆もしていたが、絵本はまだ書いたことがなかった。しかし、随所に挿絵を入れる絵本の執筆は楽しくもあり、緊張をともなう仕事でもあった。もし子供たちが挿絵を見て喜び、お母さんが本文を読んであげたら、これほど嬉しいことはない。本年夏に、『ホント先生の幼稚園見聞記』の姉妹編として、『ひとりぼっちのカエル』を出版する。こちらも合わせて読んでいただければ至上の喜びである。なお、ホント先生の「ホント」とは、オランダ語〈Hond〉で、犬という意味である。

『フロンティア法学』
第 2 版
法律文化社　2006.4
中里見　博等著
請求番号：321/U32f

『フロンティア法学』は、大学学部生の一般教養（共通教育）課程のテキストとして 4 人の著者によって書かれたもので、2003年に初版が出版され、この度内容をアップデートして第 2 版が出版された。著者はそれぞれ商法、刑法、国際法、憲法を専門としており、できるだけ現代的で先端的な諸問題（「非暴力平和主義」「性暴力」「国際法と環境保護」「国際紛争解決」など）をとおして、各法分野の基本課題を取り上げて論じている。図版やトピック、用語解説なども充実し、読み物としても興味深い内容となるよう心掛けてある。法学専攻でない学生にも、とっつきやすく、通読すると法の基礎分野のイメージをつかむことができる法学テキストとして好評を博している。

『セクシュアリティと法』
東北大学出版会　2006.3
中里見　博共著
請求番号：367.2/Sa25s

『セクシュアリティと法』は、東北大学21世紀 COE プログラム「ジェンダー法・政策研究叢書」（全12巻）の第 5 巻として刊行された。取り上げられているテーマは、売買春と自己決定権、ポルノグラフィと法規制、生殖医療、性犯罪の保護法益、ドメスティック・バイオレンス、性犯罪被害者の権利、性犯罪加害者対策、等であり、まさにこの分野の最先端の議論が展開されているといえる。執筆陣は各法分野をリードするベテランから若手院生まで含まれており、それぞれが、両性平等と人権保障の理念に基づき、ジェンダー / セクシュアリティの視点から従来の法学研究を再点検しようと格闘している。またテーマによっては、フランス、アメリカ、スウェーデン、韓国などとの比較法研究がなされており、諸外国の動向を知る上でも参考になる。

各種出版物に掲載された経済学部関係逸話
～『信夫の風』～(3)

新保　芳栄　紹介文

近代経済学研究者に関しては、森嶋通夫『智にはたらけば角が立つ』(朝日新聞社、1999年)の中で、森嶋教授が1948年当時大谷龍造先生と京都の下宿で一緒に自炊し、青山秀夫教授宅を訪問したり、中国人留学生から招待された「すき焼き会」に参加したりしたとの交友関係が綴られている。この分野については、熊谷尚夫先生の存在が大きく、関連記事が多い。熊谷先生の福島時代を含めた学問形成の過程と実践の足跡を辿り、研究を巡る様々のエピソード等を知るには、門下生の方々が先生から聞き出した『経済学対話』(筑摩書房、1992年)が有用で興味深い。加えて「創文」(創文社)1996年8月号の「追悼・熊谷尚夫先生」が極めて感動的な内容で、忘れることが出来ない。そこでは小林先生が太平洋戦争下の小都市福島という僻地で熊谷先生により「わが国でのいわゆるモダーン・イコノミクスの摂取と開拓とが ── そこに仙台からの安井琢磨教授の指導はありましたが ── 確実に行われつつあった」と書かれ、また森嶋通夫教授が昭和27年に熊谷先生に連れられて福島大学に行き、活気あふれる大学を見、その活気を大阪大学に導入すべく、熊谷先生と齋藤謹造先生の引き抜きを画策し、それが数年後に実現したという興味深い話を紹介している。さらに同誌に建元正弘教授が、熊谷先生による「最も正統的な理論体系の構築」過程の的確な展望としては、右に出るものがないと述べた戦後の学生の頃から長い間先生に師事した齋藤謹造大阪大学名誉教授が、熊谷先生の古稀記念に書いた「経済理論と政策原理 ── 熊谷尚夫先生の経済学」(「關西大学經濟論集」1984年6月)には、熊谷先生の福島時代の名講議等の思い出話も含め、先生の学問体系の構築過程が詳細に言及されている。

竹内洋『大学という病』(中公叢書、2001年)は、昭和初期の東京帝国大学経済学部の派閥抗争とそれに翻弄される教授達の姿を描いているが、その中で福島大学経済学部の教授人事に係る興味深い記述が見られる。まず、最初に大正末頃から派閥絡みで人事が停滞し、特定の助手の昇任話が持ち上がるとその他の派閥教授が拒否権を発動し、その結果「大塚久雄や中村常次郎のように私立大学や専門学校への転出さえもおこっている」と述べている。また猪木正道が新婚旅行から帰って、河合ゼミの同級生である小野(熊谷)尚夫の下宿を訪ねたら、小野が部屋でぽつねんとしており、「助手が駄目になったよ」と言った。河合の人事が全て否決されたことの余波であった。小野は河合のつてで日本生命に勤めたが、こんな秀才を学問の世界と無縁にしてしまうのはもったいない、といって仲に立つ人がいて、熊谷尚夫は3年後(昭和15年7月)福島高等商業学校講師となった。その後熊谷は安井琢磨とともに戦後日本の近代経済学をリードし、大阪大学経済学部を日本の経済学のメッカにしており、東京大学経済学部は派閥抗争のために、有能な人材を放出してしまったのであると書かれている。

また、人事に関してみると、「図書」(岩波書店)1996年9月号で、岡田与好流通経済大学教授が「大塚久雄先生を偲んで」の中で、東北大学への転任に関し自分は積極的であったが、同じ話のあった吉岡(昭彦)君は消極的であったと言っている。これについて吉岡先生自身が「私自身についていえば、福島大学経済学部には非常に親しい友人がたくさんおりましたし、学問的な雰囲気にも満足しておりましたから、あまり行く必然性を感じませんということでお断りして」と語っている(「吉岡昭彦教授研究・教育歴」〈東北大学文学部西洋史研究室、1990年〉)。さらに同書で吉岡先生は、草創期の福島大学に来て自由活発で、創造的な雰囲気があり、学問の場はこういうふうにあるべきだという貴重な体験をしたと述べている(こうした話は吉岡昭彦『歴史への旅』(未来社、1990年)にも詳しい)。

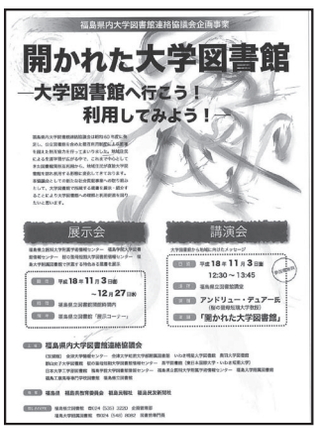
以上、何れもやや古い時代の話が多いように感じられるが、独立行政法人化に伴う大学の大競争時代が到来した中、歴史と伝統をバックに地方小規模大学らしい特徴のある、個性溢れる内容の記事に、今後とも出会えることを期待したい。

(2004年10月30日)　　(完)

福島県内大学図書館連絡協議会企画事業報告

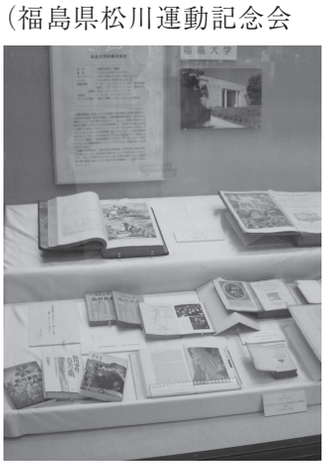
小椋　正行

福島大学附属図書館など福島県内にある国公私立大学・短期大学図書館、高専図書館及び県立図書館で組織する福島県内大学図書館連絡協議会主催で、一般市民を対象に福島県立図書館を会場として企画事業（企画展・講演会）を実施した。



この企画事業を実施する背景として、一般市民による大学図書館の利用は、これまで大学図書館と公共図書館との図書館間相互協力による利用サービスを中心として行われてきた。しかし、最近では一般市民が直接大学図書館等を訪れて利用する形態に変化してきている。この企画事業は、大学図書館から地域住民に向けた新たな社会貢献策として、大学図書館で所蔵する特色のある蔵書を一堂に展示・紹介することにより、大学図書館への関心と利用促進を図ることを目的として開催したものである。国公私立大学図書館が共同で一般市民を対象とした企画展は全国的にも珍しい取り組みとなっている。

企画展は、福島県立図書館の協力のもと平成18年11月3日～12月27日の期間で開催され、福島地区にある大学図書館４館が参加した。各大学からの特色ある蔵書として、福島大学附属図書館からは、1700年代のディドロ・ダランベール編『フランス百科全書』、ボダン『国家論』など西洋社会科学古典資料。松川資料室所蔵の『松川事件』（広津和郎）、『松川事件五〇年』（福島県松川運動記念会編）など14点。福島県立医科大学附属学術情報センターからは、「和漢書にみる医学解剖図書」をテーマに安永３年刊『解體新書』（前野良沢、杉田玄白等翻訳）など医学資料７点。福島学院大学図書館情報センターからは、「福祉心理」、「保育・介護・食物栄養・情報ビジネス」、「教員著書・記念誌」など開講科目に合わせて収集している蔵書から30点。桜の聖母短期大学図書館情報センターからは、『ベリー公のいとも美しき聖母時禱書』（ファクシミリ版）、『ヘブライ語旧約聖書』などキリスト教学関係資料の中から選ばれた聖書６点が展示された。



企画展開催期間中3,700人が見学に訪れた。県立図書館を訪れた人たちは、展示コーナー前で足を止め、大学図書館で所蔵する歴史的学術資料や専門書を熱心に見入っていた。

講演会は、11月３日の企画展オープンに合わせ、桜の聖母短期大学で図書館情報学を担当するアンドリュー・デュア教授を講師に迎え、「開かれた大学図書館」を演題として開催した。「世界の大学図書館の歴史や大学図書館の魅力」についての講演があり、一般市民や図書館関係者など約50人が参加者した。

企画事業の実施にあたっては、大学図書館と県立図書館の５館で企画事業実行委員会を作り、準備をすすめた。また、この企画事業に対して福島県・福島県教育委員会・福島民報社・福島民友新聞社から後援を頂き、ポスターやチラシを県内公共図書館・公民館、県北地域の高校などへ配布して、事業活動を周知するための広報活動にも取り組んだ。さらに、この企画事業は大学図書館から一般市民へ向けた取り組みとして、マスコミにも注目され、記事にも取り上げられられたこともあり、多くの一般市民に足を運んでいただくことができた。

なお、連絡協議会では、県内他地区でも開催するための準備をすすめている。

ブラボー！ ～附属図書館ギャラリー・コンサート 2006～

図書館でコンサート？と思われる方は、ぜひ我が図書館に来てほしい。図書館に入った瞬間、誰でもここで音楽を聴いてみたいと思うはずだ。エントランスロビーは、白いタイル張りの壁に囲まれ、２階まで大きく吹き抜けており、図書館長の表現を借りれば“欧風の教会にも似た雰囲気”を持っている。よく美術館などでミニ音楽会が開かれることがあるが、ここは図書館である。コンサートを開くには、学生の勉学の邪魔になってはいけないし、２時間を超えるフルコンサートのため、閉館後の時間帯に限られる。閉館後といっても、通常は夜まで開館しているから、学生が休みに入って夜間開館がなくなった時期になる。

昨年末の12月26日夕方６時30分、雨模様の中「附属図書館ギャラリーコンサート2006」は開演した。演奏団体は本学の学生、教職員が関係する８団体で、曲目紹介などトークを交えながらの各組15分の演奏は、多彩で楽しく、この日ばかりは図書館がコンサートホールに変身した。

予算ゼロのコンサートは、すべてが手づくりだ。洗練されたポスターは大学院生、演奏プログラム作成は職員の有志、記録係の録音、録画も本学の教職員にお願いした。

スポットライトは事務局から借用し、音の反響を抑えるためのカーペットを廊下から移動しロビーに敷き詰め、客席を暗くしステージだけを明るくするために吹き抜け天井の電球２個をとりはずした。

誌面の都合上、コンサートの顛末をお話しすることができないのは残念であるが、これらの写真で当日の雰囲気を感じていただけたらと思う。また、当日の演奏を録画したＤＶＤがあるので、ご覧になりたい方はお問い合わせいただきたい。

このコンサートは、実行委員のメンバーを始め、多くの人々に支えられ実現した。コンサートの意義については様々な解釈が可能だが、まずは、この演奏会のために悪天候の中、足をお運びいただいた多くの地域の方々、学生、教職員の皆さんに感謝したい。また、この企画に快く賛同していただいた小沢図書館長、準備段階から当日の裏方までご協力いただいた院生、教職員の皆さんにお礼をいいたい。そして何よりも、素晴らしいパフォーマンスを披露していただいた出演者の皆さんに大きな感謝を込めて、そのお名前を紹介する。

・福島大学混声合唱団（混声合唱）
・リコーダー・アンサンブル・ラ・ポーマ（リコーダー）
・リップアーベント（ピアノ独奏、連弾）
・メイプル・アンサンブル（弦楽四重奏）
・インヴェンツィオーネ・アルモニカ（弦楽、フルート、チェンバロのアンサンブル）
・猪股淳行氏（津軽三味線）
・佐藤一成氏、窪田有起氏（オペラ）
・Ｔ．Ｓ．アンサンブル（女声合唱）

来年も是非、という声も聞こえてくるが、只今実行委員たちは放心状態のため、次回のお約束をすることはできない。いずれその時に、また。

（実行委員長　南　俊二）

カウンターの内側から

齋藤　　恵（教育学研究科１年）

私がカウンター業務に就いて約一年、図書館の利用者としては約五年経ちます。しかし、学部生の頃はあまり熱心な利用者ではなかったので、図書館に関して知らないことが多く、この一年はカウンター内の仕事だけでなく、図書館のサービスに関しても勉強させてもらいました。

例えば、開架１階の奥には多数の雑誌が並んでいますが、そのバックナンバーや研究用の雑誌が閉架に保存されていることは、全く知りませんでした。現在、雑誌は和雑誌と洋雑誌を合わせておよそ12000種が所蔵されており、一般的なものから専門的なものまで様々な雑誌を見ることが出来ます。他には、二階のマルチメディア室―ガイダンスで「一番の人気のスポットです」と説明された通り、いつもたくさんの利用者がいらっしゃいます―の近くにある「貴重図書室」「大塚久雄文庫」「研究用雑誌室」は、その扉の奥がどうなっているのか謎でしたが、一般的な書店ではほとんど見ることがないような本がたくさん保管されています。本の検索をして所在場所がこれらになっているときには、カウンターに声をかけていただきたいと思います。

また、検索は図書館内にある検索用のパソコンだけでなく、ホームページからの検索も可能です。来館前に、必要な資料の所蔵の確認や、同じ分野でどんな本が所蔵されているのかを知ることができ、非常に便利です。他にも図書館の開館時間など色々な情報が掲載されていますので、一度ご覧になってはいかがでしょうか。

～附属図書館からのお知らせ～

- マルチメディア室のパソコンが新しくなりました。
- 図書館開架閲覧室 1F に PC エリア（30 台）
- AV コーナーが開架閲覧室 2F に移動!!

目　　次

- 巻頭言「この頃の読書推進について思うこと」…… 千葉　悦子（1）
- 思い出の一冊『開かれた社会とその敵 第一部 ―プラトンの呪文―』…… 内田　詔夫（2）
- 「海外の図書館」（カリフォルニア大学バークレー校）…… 後藤　康夫（3）
- 学内教員著作寄贈図書の紹介
  - 『ホント先生の幼稚園見聞記』…… 磯崎　康彦（4）
  - 『フロンティア法学』『セクシュアリティと法』…… 中里見　博（4）
- 「各種出版物に掲載された経済学部関係逸話」～『信夫の風』～(3) …… 新保　芳栄　紹介文（5）
- 「福島県内大学図書館連絡協議会企画事業報告」…… 小椋　正行（6）
- 「附属図書館ギャラリー・コンサート 2006」…… 南　　俊二（7）
- 「カウンターの内側から」…… 齋藤　　恵（8）